

概 要 報 告

実施期 日	令和 8 年 8 月 5 日 (水)
部 会 名	中学校 美術部会

研究主題

主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善
(含む個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実)

テーマ

『美術における対話とは？～自・他・材との対話、モノローグとダイアローグ～』

提案概要

実践題材名「カミノミゾテラスヒカリ」 ～紙を用いた照明制作～ 学びのプラン

中学 3 年間で育成したい資質、能力を見据えた系統的な学びの題材紹介から始まり、学習指導要領との関連に触れた後、紙を使用した照明制作「カミノミゾテラスヒカリ」について、提案された。

設計図を先に描いてから制作に入ると、それに縛られる。主体的な学びとは、計画してから創ることなのか、または作りながら考えることなのか、材との対話、自との対話、他との対話、この三層の「対話」が相互に響き合うことで主体的な深い学びが実現するのではないかと考える。

実践の内容は以下の通りである。

展開①主体性をもつための導入として、暗転演出した室内にて、神を彷彿させる音楽的效果を用いてスライドを示した。これを受けて生徒たちは、これから取り組む題材の鍵となるコンセプトや、紙の可能性のイメージ、対話活動における実験のルールを感じ取り、本題材への興味・関心を高めていくことになる。

展開②発想・構想を練る。

5 種類の紙で切る、折る、重ねる、透かすなど、実験制作後、ICT 機器の活用や実物による全員の実験結果の共有を経て、本制作の発想へと進む。実験は正解のない探索、失敗も発見として蓄積される。他者の実験からも刺激を受け、自分の発想を更新していく。

展開③思考・判断し、表現する。

ここで前述の三層の対話が響きあうこととなり、メタ認知も促進される。
実験で得た「知識・技能」を生かして照明を制作する。(材との対話)
on/off の両状態を意識しながら自分の意図や感覚と照らし合わせる (自との対話)。
使用目的・使う人の気持ちを考えながら制作した (他との対話)。
毎時間、作品の進捗状態を撮影し、振り返りシートへ貼り付け、気付いたことや次の計画を記述した (メタ認知の促進)。

展開④鑑賞・振り返り

照明をつけた状態、消した状態の両方を鑑賞し、変化を価値として共有した。また、鑑賞者が作品の見るときのポイントとなるよう、 題名、セールスポイント、希望小売価格を記入させた。
自作品のよい点、改善点とその方法、身についた力・感想を振り返りシートに記入することで、制作期間全体を俯瞰し、自らの学びの変容を捉えことにつながった。

質疑応答

質問：紙でつくるため、自立しにくい作品も出てくるのでは？どのように子どもが解決したのか。
教師の指導したところがあれば知りたい。
回答：紙を組んだり折ったりして強度をあげる必要があり、お菓子の箱などを参考に見せた。針金・木材などは使わず、紙だけで制作させた。
質問：照明器具は各自持参させたとのことだが、どのような物を用意させたのか。また、持参しな

い生徒への対応について知りたい。

回答：クラスに数名、持参できない生徒がいた。家にあるもの（例えば懐中電灯など）で発想させ、事前に学校で準備した照明をいくつか貸し出した。また友人の持っているライトで体感する生徒もいた。

協議の柱及び協議概要

協議の柱

「主体的・対話的とは何か？」を根源的に問い直し、子どもたちにとって美術の学習を通して育みたい、本当に必要な力について考える」

※参加者に付箋と模造紙を配布し、小中合同のグループに分かれて話し合い、数グループに話し合った内容を発表した。

●グループからの発表

- ・ 小学校では、図工の学習における対話の活動をどのように取り入れていけばいいか話し合った。「造形あそび」「特徴をとらえる」「いろいろな技法」なども積み上げていけるのではと考えた。
- ・ 提案では、題材名、音楽を用いた導入などがおもしろく、子どもの興味を引き出している。
- ・ 美術以外の事でも問いを持ち続ける、工夫し続けていく力が主体性なのではないか。自分の問いから生まれた作品のため、人のまねにならない。
- ・ 子どもたちに育みたい、本当に必要な力とは、どうしたら他者に魅力的にうつるのかなど、自分自身で思考をめぐらしていく力なのではないか。
- ・ 造形的な視点を通して発想し、日々を豊かにしていく意識を育む力や考えて生み出す力が生活を豊かにする。（インテリア、ファッション、SNS、写真など）
- ・ 工夫に気付く力、楽しもうとする力、自分の「表したい！」を表現できる力。
- ・ 何回も試せる力、材料を見て、行ったり来たりすることもある。
- ・ 見通しをもった最終的なゴール設定、教師が育てたい力をしっかり認識することが大切。
- ・ 今回の学びが今後どうつながるか考えられた授業。3年間の積み重ねは大切。
- ・ 表現の幅のイメージを広げる力は教師の工夫次第。
- ・ 計画と制作、どちらが先でも行ったり来たりしてよい。
- ・ ICT機器を活用した鑑賞や振り返りは便利。対話の課程を記録で振り返ることができる。

まとめ概要

中教審において、対話を軸にした取組の具現化、深化が求められている。生徒が材料の手触りを感じ取る授業の場面では、材料選定や学習環境の工夫がよく練られていた。

また、対話をする上で、何をねらいとするかが丁寧に示され、対話を苦手とする生徒の手がかりとなった。振り返りでは制作のプロセスを可視化、目的と造形的な工夫をセットで振り返り、思考力を育む授業であった。生徒がつまづいた時、以前の考えに立ち戻らせ、丁寧な関わりによって生徒の中に芽生えた新たな気付きは、創作活動に向かう原動力となる。授業を通して育まれた「造形的な見方・考え方」は、身の周りの日常生活を美しく感じ取れる豊かな感性を養うとともに、子どもたち一人一人の生きる力を育む取組となった。本題材を通して「自・他・材との対話」が相互に響き合い、思考・判断・表現を統合的に育む学びが実現できた。

一方、課題の多くは「構想段階の不十分さ」に起因しており、材との対話など実験後の構想段階を丁寧に支援することが今後成果向上の鍵となる。

グループ協議では「材・自・他の対話の往還が重要」「主体的な学び＝問いを持ちつづけること」「小から中へのつなぎとして、小学校では図工を思い切り楽しむ体験を」などの意見を交換しながら議論が行われた。校種・地域を超えて協議で活発に交流できたことはとても良かった。